

【 視 点 】

街 づ く り 雑 感

先般、帯広市を訪れる機会があり、市内の街づくりの様子を見せて頂いた。市内に森を作ろうという帯広の森、正方形に区切られた街路と緑豊かな街路樹、区画整理による 180ha の新市街地、そして、街の中心部の連続立体交差事業等々という多くの街づくりの実例に感銘を受けた。「ここには、創り出してゆく都市計画の見本があるように思う」と申し上げたら、市の担当の方は、「土地柄でしょう」と簡単に言われた。確かに、本州の都市に比べて広大な土地が存することが、街づくりに有利なことは言うまでもないが、それと同時に、その根底には街は創り出して行くものであるという思想があるのではないだろうか。それなくしては、森を作るというような発想はなかなか生まれえないのではなかろうか。

世上よく言われることは、我が国では土地利用計画が不十分な故に、街が雑然としているということである。しかし、振り返ってみると、我が国のほとんどの街は、自然発生的に誕生し、成長し、そこに土地利用計画を適用したというのが実情であろう。これに対して西欧では、気候や治安が厳しいこと、建築物の材料に石が用いられて永続可能なこと等から、街は土地利用計画に従って作られるものとされてきた。即ち、この場合、土地利用計画の占める位置とともに街を作るという思想が極めて重要になるのであり、帯広市の場合もこれに該当するのではないだろうか。

昨今の街を見ると、一応の施設水準が整備されているために、より良い街を作ることへの動機づけが見出し難く、また、その内容においても機能とともに環境への配慮が重要視される等課題が多い。このような時代に、我が国の街がより整然として発展するためには、土地利用計画の精度を上げる以上に、計画に従って街を作りだしていくという思想の徹底が必要のように思えてならない。しかもその際、肝要なことは街の変化に対する合理的な予測手法の確立とその予測について住民が議論し、意識を統一して進むというシステムづくりではないかと思う。

(助)土地総合研究所 専務理事
河 原 崎 守 彦